

第1次世界大戦後ドイツは、前代未聞とも言える桁外れのハイパー・インフレに襲われた。戦争に敗れたドイツは戦時賠償金支払いのため、国と地方を問わず国の隅々に造幣局を設置して多種多用の多額の紙幣を発行し、戦後数年間にドイツ1国だけで発行された紙幣は現実離れの約3万6千種に及んだ。当時3.7日ごとに物価が2倍になり、そのため市民はいつも大量の紙幣をカバンや、リュックに詰め込んで持ち歩いていたと言われている。今ではそのような極端なインフレに遭遇するようなケースは、ほとんど見られなくなった。それでも途上国などでは、時に物価が見る間に上がり、1日経ったら品物によっては倍近くの値に上って、手の施しようがない事態が実際に起きることがある。実際アルゼンチンでは、現在手のつけられない物価上昇が進行中で、通貨ペソの価値が下落し、昨年8月には通貨が2割も切り下げられた。そのうえミレイ新大統領が、大胆にも中央銀行を廃止し、通貨ペソを米ドルに変更するとまで公言する有様である。

30余年前同じ南米のブラジルを訪れた当時、ブラジルは経済不況に陥り、国内に失業者が溢れ物価の高騰が続いていた。通貨レアルの価値が米ドルに対して前年比1割以上も

下がり、実生活でもレアルの価値が下落して、外貨交換レートも日に日に下がっていた。この時は、一度に多額の紙幣を両替せずに、支払いの直前に両替するように努め、極力無駄な出費を抑えるよう工夫を凝らしたものである。ところが、ブラジルを訪れた数年後、今度は中米のメキシコで更に驚くハイパー・インフレのような物価高騰現象に遭遇した。その挙句に平価切下げというよもやの事態に出くわしてしまった。メキシコ入国時に国際空港で米ドルから両替したメキシコ・ペソが、数日後には早くもその価値が大きく下落してしまった。しかも市内の銀行で新たに両替した紙幣は、空港で手にした紙幣とはまったく別のものだった。紙幣に印刷された「0」の桁が2つも消え、同価値の別の新しい紙幣に変わっていた。

当時メキシコ国内では平価切下げは必然と考えられていたようだが、外国人旅行者には知る由もなかった。平価切下げは、インフレに対する外貨防衛策のための小出しの両替をあざ笑うかのような衝撃的な体験だった。これにはある程度順応するより仕方がなかった。まるで第1次世界大戦後のドイツを旅行しているかのようで、現実の世界ではないような気がしたものである。帝政ローマ時代の名言「歴史は繰り返す」は、2千年の時を経た今も世界のどこかでしたたかに生きているのだ。

(エッセイスト 近藤節夫)